

放射線技師と医療安全に関する考察

折田 信一

第59回国立病院機構総合医学会
(平成17年10月15日 於広島)

IRYO Vol. 61 No. 1 (38-42) 2007

要旨

患者目線の医療の実践という観点から放射線部門での検査や治療における医療安全とは、患者にとってどのように映るのかアンケート調査を行った。その結果、事故やトラブルのないこと、また、検査に対する不安を軽減するために「説明や確認の徹底」「介助や声掛けの実施」「清潔な環境の整備」といったことを患者の立場に立ってわれわれ放射線技師が実践することが求められていることが把握できた。

キーワード 医療安全, 放射線技師

はじめに

医療安全管理の基本理念は、「患者の立場に立ち、安心して医療を受けられる環境を整えること」である。安全な医療を提供するためには、個々の医療従事者が自ら医療事故防止対策を講じること、さらに「人は誰でも間違える」という前提のもとに病院全体が組織的に医療安全のシステムを構築すること、これら2つを推し進めていくことが必要であるといわれている。これらの施策は各施設において十分に行われていると考えられる。しかし、基本的に医療安全施策は医療者側の視点で考えられており、患者側からの視点については十分に注意が払われているとは言い難い。そこで今回、患者目線という観点から、放射線部門での検査や治療における医療安全とは、患者にとってどのように映るのか調査を行った。さらに安心、安全な医療を提供するための実践方法について模索した。

患者アンケート調査の方法

放射線検査や治療を受ける上で患者にとって何が危険と映るのか、医療安全をどのように認識しているのか、また、検査説明が行われて内容を認識しているのか、さらに、どのような説明を望んでいるのかを把握するためにアンケート調査を行った。

1) 対象

入院・外来患者 500名 (平成17年7～8月, 鹿児島医療センター)

放射線検査 (一般120名・CT120名・MR90名・RI140名), 放射線治療30名

2) 調査方法

紙面によるアンケート調査と口頭による聞き取り調査

3) 調査内容

質問①: 検査や治療の安全性に疑問を感じましたか?

国立病院機構鹿児島医療センター 放射線科

別刷請求先: 折田信一 国立病院機構鹿児島医療センター 放射線科 〒892-0853 鹿児島市城山町8番1号
(平成18年1月23日受付, 平成18年3月17日受理)Discussion on Radiological Technologist and Medical Safety
Shinichi Orita

Key Words: medical safety, radiological technologist

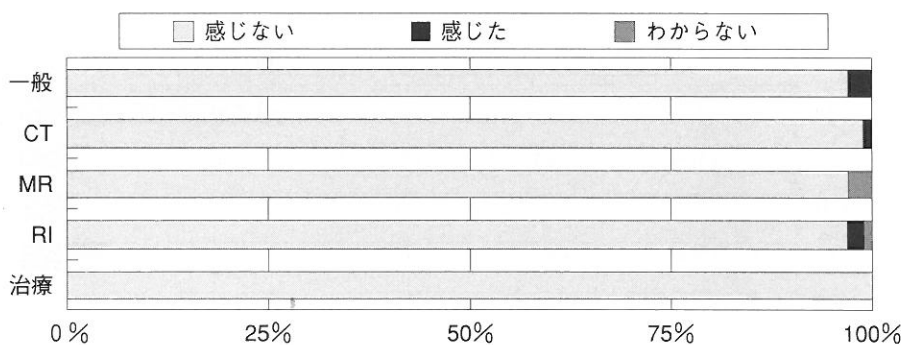
- 質問②：検査や治療に何か不安を感じましたか？
- 質問③：検査や治療に対する説明を医師，放射線技師から受けましたか？
- 質問④：説明の内容は理解できましたか？
- 質問⑤：医師や技師にどのような説明を望みますか？

安全性に疑問を感じた患者は各モダリティともに5%未満であった。また、これらの安全性を疑問視した患者は、グラフの下に示す「名前を間違えられた」「再撮影をされた」「注射漏れをおこした」「検査終了後転倒した」といった危険事象を直接被った患者であった。また、聞き取り調査では、事故や失敗やトラブルがなく順調に検査が終了することを望んでいた。

患者アンケートの結果

図1に「①検査や治療の安全性に疑問を感じましたか？」という質問に対する回答を示す。

表1に「②検査や治療に何か不安を感じましたか？」という質問に対する各モダリティにおける不安事象内容とその回答数を示す。検査目的や撮影内



検査	危険事象
一般	名前間違い・放射線被ばく
CT	注射漏れ
RI	転倒・装置接触・注射間違い

図1 アンケート結果(1)

「質問①検査や治療の安全性に疑問を感じましたか？」に対する回答結果

表1 アンケート結果(2)

「質問②：検査や治療に何か不安を感じましたか？」に対する回答結果

モダリティ	不安事象 (複数回答)
一般	撮影目的や内容(5)・放射線被ばく(4)・待ち時間(4) 清潔関連(3)
CT	造影剤使用時の熱感、副作用(7)・撮影目的や内容(5)・注射漏れ(4) 放射線被ばく(3)・検査終了後のふらつき(2)・検査料金(2)
MR	装置の圧迫感(8)・装置の音(6)・検査目的や内容(5) 検査時間の長さ(5)・待ち時間(4)
RI	放射線被ばく(8)・装置の接近(5)・検査料金(5)・検査目的や内容(5) 検査終了後のふらつき(4)・注射漏れ(4)・待ち時間(4) 検査終了後の行動(2)
治療	治療後の状態(ふらつき、めまい、皮膚状態)(8)・放射線被ばく(6) 治療料金(5)・脱衣(4)・皮膚へのマーキング(3) 治療装置の概観や音(3)・治療時間の長さ(2)

容，放射線被ばく，装置の形状による圧迫感，検査終了後のふらつきといった内容について不安を感じている患者が多い。

図2に示す「③検査や治療に対する説明を医師，放射線技師から受けましたか？」という問いに対しては，一般撮影以外のモダリティでは約90%の患者が説明を受けたと認識していた。さらに，聞き取り調査では，一般撮影において「医師から撮影理由の説明がない」，「技師から撮影内容の説明がない」などの回答が多かった。また，「④説明の内容は理解できましたか？」という質問ではMRI，RI，放射線治療に関する説明内容が患者にとって理解しにく

いようであった。

表2に「⑤医師や放射線技師にどのような説明を望みますか？」という質問に対する回答を示す。医師に対しては，詳細な検査目的や内容，さらに病状の治癒状況について，わかりやすい言葉で優しく患者の立場に立って説明してもらうことを望んでいる。放射線技師に対しては，撮影，検査内容をわかりやすく，検査時の注意点を明確に説明してもらうことを望んでいる。さらに聞き取り調査では，「医師や技師の説明が早口で専門的過ぎる」「急がさずにわかりやすい掛け声で検査してほしい」「検査終了後の明確な案内をしてもらいたい」などの回答があっ

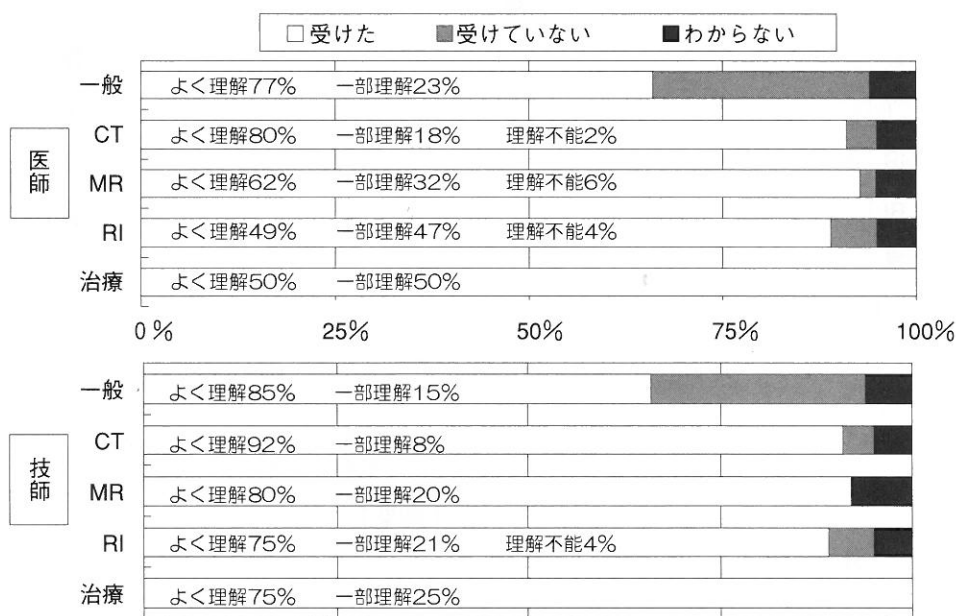


図2 アンケート結果(3)

「質問③：検査や治療に対する説明を医師，放射線技師から受けましたか？」
「質問④：説明の内容は理解できましたか？」に対する回答結果

表2 アンケート結果(4)

「質問⑤：医師や技師にどのような説明を望みますか？」に対する回答結果

	説明・態度
医師	<ul style="list-style-type: none"> ・ 詳細な撮影、検査目的（痛み、副作用、料金等含む） ・ 病状の治癒状況 ・ 説明の意志を持ってほしい ・ 患者にわかりやすい言葉で説明してほしい ・ やさしく、患者の身になって説明してほしい
放射線技師	<ul style="list-style-type: none"> ・ わかりやすい撮影、検査の内容（検査時間、被ばく） ・ 検査時の注意点 ・ 急がさずにゆっくり対応してほしい ・ 大きな声ではっきりとかけ声をかけてほしい ・ 検査終了後の案内をきちんとしてほしい

た。

考 察

1) 患者からみた医療安全の視点

アンケート調査の結果から、患者からみた医療安全とは「事故がない」「失敗がない」「深刻なトラブルがない」ことであり、ほとんどの患者が放射線検査や治療で事故やトラブルを被るとは考えていない。基本的に患者は医療業務の内容を知っているわけではないため、医療事故につながるような具体的内容、たとえば患者IDの打ち間違いや放射線治療における処方線量の間違いといった医療事故の発生を危惧している患者は少ない。他方、危険を感じないまでも、検査や治療に対し何らかの不安を抱いている患者は少なくない。これらの不安事象は全般的に医療者側の説明や確認の不足が起因している。患者は「不安に思っていることに対してわかりやすい説明が欲しい」「今行っている行為に対して説明や確認が欲しい」と願っている。さらに、「質問や不安を忍耐強く聞いてくれる」「医療者が絶えず注意を払って声掛けをしてくれる」「清潔な環境で検査、治療を受けることができる」といったことを望んでいる。すなわち、患者の不安を軽減するためのポイントをまとめると、「説明や確認の徹底」「介助や声掛けの実施」「清潔な環境の整備」ということになる。このように患者からみた医療安全は複雑なものではなく、われわれ医療者は患者の不安を理解し、それらを軽減するための方策を実践する必要がある。

2) 患者目線の医療安全実践

①説明の徹底

検査目的や内容、放射線被ばく、装置に関する事などについて患者に明確な説明を行うことが必要である。基本的に検査目的や内容についてのインフォームドコンセントは医師が行うが、医師の説明が不十分な場合、放射線技師が積極的に検査内容や注意事項の説明補足を行うことが大切である。とくに放射線被ばくに対する患者の不安は大きく、具体的なデータを示して、理解しやすい説明を行うことが重要である。説明の方法については医療者の視点に偏った説明を行うのではなく、カウンセラーや翻訳者のようなスタンスで患者の立場に立ったわかりやすい説明を行うことが大切である。他方、時間的制約から詳しい説明が困難な場合は、検査案内や被

ばくに関するポスターやパンフレットを作成して対応するなどの対策も必要である。

②確認の厳守

放射線部門で最もヒヤリ・ハットの数が多い項目は、患者の誤認であるといわれている。また、医療界は他の産業界と比較して、確認する行為が意外に行われていないともいわれている。確認を行うには、患者と十分なコミュニケーションをとることが不可欠である。患者自身に名乗ってもらい、氏名の復唱・確認を確実にを行う。さらに各装置への氏名入力の際に指先呼称確認をするなどの確認行為を徹底することが必要である。

③患者状態の把握と介助の徹底

患者の転倒や衝突事故はほとんどが検査室内でおこる。検査室内でおこる事故は放射線技師の責任であり、事故防止のための患者看視が不可欠である。看視とは警戒して、用心して見守るという意味であり、患者の状態把握、さらには介助や声掛けの徹底が必要である。また、転倒防止の工夫、衝突防止のための移動経路の確保、事故防止のための用具の工夫、設備の改良なども必要である。

④感染予防、清潔環境の整備

感染予防の観点から、医療者は患者に触れる前に必ず手指を消毒することが必要である。また、清潔な検査衣を用意すること、患者が触れる機器などの表面は清潔にしておくことが大切である。患者は医療者が思っている以上に清潔に対し敏感で、感染防止や環境面の整備は病院施設では不可欠である。

3) 医療安全への患者の参加

元来、患者参加とは健康や医療の内容に関して自分の意志で決定するという意味から始まっているが、昨今では医療事故回避のために患者にも積極的に医療安全に関与していただくというところまで進化している。一見わかりにくいようだが、欧米では積極的に取り入れられており、厚生労働省の医療安全検討ワーキンググループからも提唱されている。たとえば、患者自身から名前を名乗っていただく、さらに医療者の対応が不十分であるならどんどん指摘していただく。また、「検査をしている時に機械の音がおかしい」「何かが体に触れる」等の不安に思うことについても遠慮なくいっていただく。このように患者からも情報を発信していただき、医療安全を担保するために積極的に医療安全に参加していただくことが大切である。

4) 医療事故 0 運動の実践

全国国立病院療養所放射線技師会では「医療事故 0 運動の実践」を会員の実践目標として掲げ、患者目線の医療安全を担保するために全国的に啓蒙が行われている。下記に実践内容の概要を示す。

- ①明瞭でわかりやすい言葉で患者に説明する。
- ②患者呼称はフルネームで、さらに必ず患者に名乗っていただいで確認する。
- ③ドアの開閉は積極的に技師の手で、技師は技術者でありドアマンである。
- ④入室後は患者から目を離さない。撮影、検査室におけるすべての責任は放射線技師にある。
- ⑤検査内容の説明、確認をきちんと行う。
- ⑥脱衣の必要な検査は可能な限り検査衣を着用してもらう。
- ⑦患者に触れる際は、きちんと説明して同意を得る。
- ⑧検査終了後は必ずお疲れ様でしたの声掛けをする。
- ⑨検査室は自分が患者になったつもりで常に整理整頓、清潔を保つ。

- ⑩放射線機器は必ず始業、定期点検を確実にを行い、安全に使用する。

ま と め

患者に安全な医療サービスを提供することは、医療の最も基本的な要件の1つである。放射線部門における検査や治療は、放射線を扱う、大型機器を扱うといった特殊なリスクの温床が存在する。可能な限りの医療安全施策を講じることは医療者として当然であるが、そこに患者の目線を意識することは非常に重要である。患者が感じている医療安全に対する目線とは、「説明や確認」「介助や声掛け」「清潔な環境」といった至極当然のことである。われわれ放射線技師は、患者の視点に立った医療安全を実践するために、患者の不安をいち早く察知することのできる鋭敏な感性を養うとともに、組織的に安全行動の規範を取り決め、確実に守ることが必要である。